

「カエルの学校」 ～「カエル」と「キノコ」の里からむらづくり～

福島県 川内村



「農楽塾」の田植えには、毎年たくさんの家族が来村し、農業体験を通じて交流を深めている。



収穫祭では、都会の子ども達が蕎麦打ち体験などに真剣に取り組み、その後みんなで楽しくいただいた。



古代米「紫黒米」を原料にした地酒。村と親交の深かった詩人草野心平氏の「天山文庫」にある池にちなんで「天山十三夜」と命名。

事例の概要

- 川内村は、福島県相双地域に位置し、南北を阿武隈高地が連なる緑豊かな村である。貴重な大自然や伝統文化を次世代に繋げなければいけないと危機感を持った住民有志が「なんとか地域に元気を与えたい」との思いでボランティアを募り、平成15年4月に「元気な川内を創る会」を発足させ、「カエルの学校」として「体験と交流、地域の資源掘り起こし」をテーマに3つの事業を展開してきた。
- 農業体験を通じた都市と農村の交流の推進、キノ

コを地域資源とした野生キノコ案内人の養成とガイドブックの作成、米の転作と遊休農地活用を進めた上での「川内高原うどん」や古代米を原料にした地酒「天山十三夜」の商品開発など、村や関係団体と連携し、地域の人々を巻き込んで地域の活性化に大きな実績を残している。

- 現在では人口3,000人余りの村内に約60世帯、140名ほどの1ターン者が住むまでになっており、交流居住の推進の面でも顕著な成果が現れている。

評価のポイント

川内村は、都会にはない豊かで美しい里山など農村文化が数多く残っている一方で、人口減少が進み、高齢化や地域の担い手不足などから資源が放置され荒廃が進んでいる。「何とか地域に元気を与えたい」との思いで、危機感を持った住民有志が、ボランティアを募り、農作業や自然体験を通じた都市と農村の交流を進める目的で、「元気な川内を創る会」を平成15年4月に組織化、平成17年度から本格的に活動を展開した。

まず、都市と農村の交流人口拡大のため、「農楽塾」を開塾し、都会の人を中心とした参加者に田植えから収穫までの有機米の栽培等を通じて安全・安心な食への関心を高め、地産地消、食育活動を推進している。関東圏などから毎年5回のべ80名ずつが農業体験で来村するなど、着実な交流人口の増加に繋がっている。

また、自然の恵みである「野生キノコ」の地域資源を活かして、「野生キノコ指導者養成講習会」を

開催するなど、地元の人々に率先してキノコの自生研究を推進するとともに、多くの知識を習得させ、菌類部門の指導者として野生キノコ案内人を養成している。この案内人の取組みは、村民のさらなる地域資源の再発見等にも繋がると期待される。

さらに、村の特産品づくりのため、小麦や古代米の栽培を復活させ、関係団体と連携して「川内高原うどん」や古代米を原料にした地酒「天山十三夜」を開発し、商品化に繋げている。

こういった取組みが契機となり、現在では約60世帯、140人ほどの1ターン者を受け入れる村になっている。1ターン者も地域に溶け込み、地域の活性化にいろいろ関わっている。「元気な川内を創る会」は、こうした村全体の動きの一つの典型例であり、地元の人と1ターン者がそれぞれの特性を活かしながら、協働して活動にあたり、村の活性化の重要な一翼を担っているという点が評価された。



「野生キノコ指導者養成講習会」を行う森では、300種以上の菌類が観察されている。



「農楽塾」の稲刈りの合間に。子どもは遊びの天才。

福島県 川内村 (かわうちむら)



国勢調査人口 (単位:人)				
昭和35年	昭和45年	平成7年	平成12年	平成17年
5,966	4,709	3,797	3,384	3,125

人口増減率 (単位:%)				高齢者・若年者比率(17年)	
H17/S35	H17/S45	H12/H7	H17/H12	高齢者比率	若年者比率
△47.6	△33.6	△10.9	△7.7	33.8%	13.3%

交通のご案内

自動車 常磐自動車道富岡ICから県道36号(小野富岡線)経由25分
磐越自動車道船引三春ICから国道288号経由50分
鉄道 JR東北新幹線郡山駅からタクシー利用70分
JR常磐線富岡駅からバス利用60分又はタクシー利用30分
飛行機 福島空港からタクシー利用70分

団体連絡先

元気な川内を創る会
〒979-1201
福島県双葉郡川内村大字上川内町分211
TEL.0240-38-2033 (小松屋旅館)
<http://www.nougakujuku.com/aboutus.htm>